

## *Transport to Summer* における戦争・抽象・系譜

長 畑 明 利

スティーヴンズの *Transport to Summer* には戦争の影が色濃い。しかしここでは、兵士の戦場での死が個人レベルではなく、より広く、国民、人種、さらには人類という範疇の中で捉えられている。兵士一人一人が個人としてではなく、兵士の集合として「抽象化」されるのである。この「抽象」という概念は、直接戦争を扱わない詩にも見出すことのできる、この詩集の大きな特徴と言える。一方、スティーヴンズはこの時期、自身のルーツに興味を抱き、専門家に自分の家系の調査を依頼している。興味深いことに、この系譜探しを反映する詩にも、スティーヴンズが自身の生をより広い存在の連鎖の一部として捉え、個人としての自己を国民、人種、人類といった、より「抽象的な」集合に収斂させようとする様を窺うことができる。本稿は、詩集 *Transport to Summer* に見られるこれらの特徴 戦争の影、抽象性への着目、家系あるいは系譜への関心 を指摘するとともに、それら相互の関連性を明らかにすることを試みるものである。

### 1. スティーヴンズと戦争

*Transport to Summer* は1947年の出版だが、収録作品の多くは1942年から1946年にかけて発表されている。主な詩の初出年を調べると、“Notes toward a Supreme Fiction” が1942年。“Dutch Graves in Bucks County”、“Chocorua to Its Neighbor” は 1943 年。“The Bed of Old John Zeller” が1944年。“Ésthetique du Mal”、“Description without Place” が1945年。“Chaos in Motion and Not in Motion”、“The House Was Quiet and the World Was Calm” が1946年である。*Transport to Summer* 収録の詩の多くが第2次大戦中に、あるいは戦後すぐに書かれていると考えられ、詩集全体に戦争への言及が多いのも、自然なことと言える。<sup>1</sup>

スティーヴンズには兵士として戦場に赴いた経験はないが、第2次大戦は彼の身边にも直接・間接的な影響を及ぼしていた。例えば、彼の親友であった Henry Church の家は占領下のフランスにあったし、プリンストン大学での講演 (“Noble Rider and the Sound of Words”) の際に知り合ったユダヤ人の詩人 Jean Vahl の詩から、スティーヴンズは強制収容所の悲惨さについての知識も仕入れていた。姪の夫、自身の甥も従軍しており、彼らからの手紙も戦地の状況についての情報源になっていた (Filreis 38-39)。Filreis によれば、スティーヴンズは Henry Church を通じて知り合った、フランス生まれの Auberjonois

という青年からも戦地の情報を仕入れていた。彼はアメリカに帰化した後、アメリカの参戦とともに従軍して北アフリカ戦線を闘ったが、アルジェで発行されていた *Fontaine* という文芸誌の編集に関っていた。*Fontaine* には、その特別号をロンドンの「自由フランス」を通じて、イギリス空軍の飛行機から占領下のフランスに散布するという計画があり、スティーヴンズの “Notes toward a Supreme Fiction” もその特集号に掲載される可能性があったという (Filreis 36)。

一方、アメリカ国内では戦時体制が整えられ、社会生活の様々な側面にその影響が見え始めていた。スティーヴンズが勤めていた保険会社 Hartford Accident and Indemnity, Co. の社員も一人また一人と従軍し、その様子が社内報に報じられた (Filreis 41)。男たちが戦場に赴くにつれ、彼らが様々な会社で就いていたポストに女性が採用されるようになっていったが、スティーヴンズの娘 Holly も、アメリカが参戦した今、大学に行く意味を見出せないと考え、大学を辞めている (Filreis 39)。また灯油の配給制が始まり、政府からは旅行を極力避けるようにという指示も出されていた。*Transport to Summer* には “No Possum, No Sop, No Taters” (「ポッサムもいなければ、パン屑もジャガイモもない」) という詩が収録されているが、この詩のタイトルからも、スティーヴンズの生活に及んでいた戦時の窮乏生活の様子が垣間見える。この詩が執筆された 1942 年の冬、スティーヴンズの家では配給された灯油が切れ、また、しばしば冬を過ごしたフロリダへ行くことも断念せざるを得ず、彼は Hartford で厳寒の冬を越す羽目になったのであった (Filreis 47)。他の多くのアメリカ人同様、スティーヴンズも間接的に戦争を闘っていたのであり、その自覚を裏付ける描写や表現がこの時期の彼の詩に現れている。

*Transport to Summer* の冒頭には “God Is Good. It Is a Beautiful Night” が置かれている。この詩の初出は 1942 年であるが、1947 年、つまり戦争終結後に出版された詩集冒頭の詩として見ると、その意味内容およびトーンは、まさに時代にふさわしいものと感じられる。

神は善である。美しい夜だ

茶色の月よ、茶色の鳥よ、まわりを見るがよい。舞い上がり飛び立とうとするときに  
まわりを見て目にとめるがよい  
地上の首とツイッターを。

目にとめるがよい、茶色の月よ、昇っていこうとするときに  
戸口の本と靴を  
朽ちた薔薇を。

ここは昨夜おまえが訪れた場所だ  
すぐ近くまで飛んできた場所、飛んできて飛び去ることのなかった場所だ。  
いまふたたび

おまえの明かりに照らされて、首が話している。それは本を読んでいる。  
ふたたび学者になったのだ、  
天のランデヴーを求め

この上なく錆びついた弦で、か細い音楽をつまびきながら  
夏の切り株から、この上なく赤い香りを  
絞り出しながら。

おまえの炎のような翼から、神々しい歌が降りたつ。  
おまえの時代の大きなひろがりの歌が  
すがすがしい夜を突き刺す。<sup>2</sup>  
(CP 285)<sup>3</sup>

詩の前半に現れる、地上に残された「首」、戸口に残された「靴」は、時代背景を読み込めば、戦争を暗示する象徴とみなすことができる。朽ちたままになった薔薇、錆びつき、もはや使われぬままに捨て置かれたツィターの弦、捨て去られたままの本も、戦争のために文化的活動が中断されていたことを示唆しよう。後期のスティーヴンズがしばしば用いた3行一連の詩形で、戦争のために荒廃し殺伐とした情景を描くことによって、スティーヴンズは、実際には戦場にならなかったアメリカ本土にいなながらも、平和な時代に育まれた文化的営為が停滞していたことを暗示している。

これに対し、詩の後半で強調されるのは「回復」である。「首」は再び「本」を読み始め、「学者」になろうとしている。スティーヴンズがその生涯にわたって描いた真理の探求者が復活するのである。「ツィター」の弦は錆びついているとはいえ、復活した学者はこれを奏で、再びかつての「青いギターを弾く男」になろうとしているかに見える。最高の境地の象徴である「太陽」も再び強調され、詩の末尾に現れる翼は、“Notes toward a Supreme Fiction”の“*It Must Give Pleasure*”に現れる天使のそれを思わせる。その翼から降りたつ「時代の大きなひろがりの歌」は、“Mrs. Alfred Uruguay”で言及された「有能なる想像力(*capable imagination*)」(CP 249)を持つ詩人の言葉に他ならない。戦争という想像力を抑圧する現実に対して、詩人の言葉は、まるで空にはばたく鳥の翼から降り

来る歌のように、荒廃した世界にひろがり、そこに生きる者たちに生きる意味を与える。戦争からの解放感を感じさせる「すがすがしい夜」(“fresh night”)に、スティーヴンズの理想の詩人は、社会と精神の荒廃を治癒する想像力の世界をもたらすのである。

詩集の冒頭に、戦争の終結による解放感を感じさせるこのような詩が置かれていることは、<sup>4</sup> この詩集が戦争の終結および勝利によってもたらされた解放感を描くことを予告しているかに見える。しかし、後続の詩には、戦争と想像力をめぐる、より一般的な問題を扱うものが多い。“Gigantomachia”、“Dutch Graves in Bucks County”、“Repetitions of a Young Captain”、“Paisant Chronicle”、“Flyer’s Fall”、“A Woman Sings a Song for a Soldier Come Home”といった作品はその例である。“Ésthetique du Mal”、“Notes toward a Supreme Fiction”といった名高い長篇詩にも部分的に戦争への言及があるが、そこでも戦争の悲惨が写實的に描かれるのではなく、むしろ戦争を対象として独自の詩的瞑想を展開するという性格が強い。確かに戦争の影は詩集の中に色濃く落ちているが、その扱いは抽象的であり、スティーヴンズが生涯追求した想像力と虚構をめぐる瞑想のなかに組み込まれているのである。

戦争の具体的な場面を提示するのではなく、戦争というものを一般的に、また抽象的に描くスティーヴンズの姿勢は、当時アメリカの詩壇で闘わされていた戦争詩のあり方をめぐる議論と無関係ではない。Filreis が詳細に示すように、戦時における詩作のあり方について、当時、対立する二つの見解が闘わされていたのである。一方では、*New Poems 1943* をはじめとする戦争詩集の類が続々と出版されており、また Archibald MacLeish や Van Wyck Brooks をはじめ、作家や詩人も戦争を遂行する国に貢献することが必要だという考えを述べる者がいた。それに対し、Allen Tate、John Crowe Ransom ら、いわゆる New Criticism の中心的指導者として活躍していた詩人たちは、詩は現実の出来事を直接論じるものではないという高踏的な立場を主張し、戦争に関しても、それを直接扱う詩は価値が低いという主張をなしていたのである(Filreis 73)。スティーヴンズの立場は、少なくとも戦争初期には、Tate、Ransom らのそれに近いものであったように見えるが、後には ことにアメリカの参戦以後 彼はこうした Formalist たちの立場に同調せず、現実と想像力のせめぎ合いの論理を戦争の文脈に応用しようと努めたと考えられる。戦争を題材にした作品にスティーヴンズ特有の「抽象」をめぐる思索が頻出するのはその証である。

## 2．兵士と抽象

*Transport to Summer* に収録されたスティーヴンズの戦争詩には一つの際だった特徴がある。それは、兵士の戦い、そして兵士の戦場での死が、個人のレベルではなく、国民、

人種、さらには人類といったより広い範疇の中で捉えられていることである。兵士一人一人が個人としてではなく、兵士の集合体として「一般化」あるいは「抽象化」され、さらに、たとえ個人は死を遂げるとしても、抽象的な兵士の「集合体としての生」は途絶えることがないというレトリックが展開されるのである。

たとえば、“*Esthétique du Mal*”(VII)は先に触れた戦争詩のアンソロジー *New Poems 1943* に単独で収められたものだが、その第1連では、一人の兵士の傷が、複数の兵士の複数の傷へ、さらには、すべての兵士のすべての傷へと拡大していく。そして、その兵士の総体が「時の兵士」として抽象化され、「時の兵士」は不死を獲得するとされる。

### 悪の美学 (VII)

薔薇のなんと赤いことか！それは兵士の傷口  
多くの兵士たちの傷口、倒れて血に染まった  
すべての兵士たちの傷口、巨大になり  
不死となった「時の兵士」。

いかなるくつろぎも見出されぬ山  
(より深い死への無関心がくつろぎでないのなら)  
闇の中、それは影たちの丘のように聳え  
「時の兵士」はそこで不死の休息をとる。

不動のまま風に乗って動く同心円の影たちが  
不死のままベッドに横たわる  
「時の赤い兵士」の眠りの中に  
神秘の渦巻きを作る、

彼の仲間の影たちが真夜中に彼をぐるりと取り囲み  
夏は彼らにその香しい息吹を、その重い眠気を吹きかけ、  
彼 「時の兵士」 に  
夏の眠りを吹きかける。

その眠りの中で、彼の傷は善いもの、なぜなら生が善いものだったから。  
彼のいかなる部分も死の一部とはならなかったのだ。  
女が片手で自分の額を撫でる。

その手の下に「時の兵士」は穏やかに横たわる。

(CP 318-319)

第 2、第 3 連に見られるように、死を遂げた個々の兵士は影にたとえられ、これが集まって丘を為し、抽象化された「時の兵士」はそこで不死の休息をとる。影たちは同心円を形成し、一人一人は動くことがなくとも、死者の総体は風に乗って動いている。さらに、後半の第 4 連、第 5 連では、死者の総体として抽象化された「時の兵士」が、再び個人としての存在を認められているように見える。個人から抽象的な集合体へ、そしてその集合体から再び個人へという展開は、Walt Whitman の “Song of Myself” の展開を思わせるが、<sup>5</sup> それはこの時期のステイーヴンズの詩に顕著に現れるものであり、この詩も例外ではない。

集合体としての、あるいは抽象としての兵士というレトリックは、“Gigantomachia” にも見出される。「ギガントマキア」というタイトルは、ギリシャ神話における巨人族と神々の闘いを指すが、ステイーヴンズはこの言葉を兵士の集合体の形容として、またそのような集合体の一部を構成することによって勇敢な兵士となる個人の形容として用いている。

#### ギガントマキア

兵士として、彼らは多くを担うことができなかった。  
彼らの忘却には過去がなかった。  
集団には自我がなかった、つまり、より勇敢なる存在が  
負傷することなどけっしてありえぬ体が  
誰が死んだとて終わることなどけっしてありえぬ生命が  
ひとつの抽象である存在が  
静脈に浮かぶ一人の巨人の、勇気にみなぎる心臓がなかった。

しかし、自己満足の粗品を剥ぎ取ること  
常にそこにある誘惑を追いやること  
そこのない悲劇のための台本を拒絶すること  
このうえなく単純な目で変化に立ち向かうこと  
それは戦争が拡大して見せるものを見つめることだった。  
それは増加され、大きくされ、単純にされ  
単一にされ、一なるものにされたのだ。これは否定ではなかった。

ひとりひとりが一人の巨人になったのだ、  
巨大さとともに外へ捨てられ、重いものと  
高いものを他の者たちから受け取って  
まるでそれを人間ならざる高さで起源から  
一人の人間ならざる人から、一つの仮面から  
霊から、装具から受け取るかのように。兵士たちの目には  
新月が20フィートに伸びる。

(CP 289)

この詩でも、焦点が当てられているのは個人の兵士ではなく、個々の兵士の集合体、つまり、複数の兵士の総体である。第1連からわかるように、スティーヴンズはそれを「抽象」という言葉で示している。実際に戦場で戦っている個人の兵士ではなく、それらの兵士の総体という抽象化された「集合体としての兵士」という意識がなければ、個々の兵士は「多くを担う」ことができず、一人の兵士が死んでも維持される、時と場所を越えた超越的で継続的な戦闘の集合体を維持することはできない。集団全体に集合的な自我を見ること、負傷することとは無縁の、全体としての「体」を想定すること スティーヴンズが言う「抽象」としての兵士という着想は、個人の生と死を超越する、人間のより大きな集合体の必要性を訴えるものに他ならない。

スティーヴンズはさらに、この「抽象」としての兵士の総体を、「一人の兵士が死んでもなお終わることのない生命」を持つ「巨人」という比喻で示している。個々の兵士は戦場で死を遂げるとその生命が潰えるが、「巨人」に喩えられる、総体としての、あるいは「抽象」としての「兵士」は、死ぬことなくその存在を続ける。しかしそれだけではない。逆に、一人一人の兵士は、そうした兵士の集合体の重みを担い、彼ら自身が一人一人の巨人になる。彼らは「人間ならざる高さで起源」から、「一人の人間ならざる人から、一つの仮面から / 霊から」、つまり、兵士の総体を擬人化した「巨人」という虚構の存在から、「重いものと / 高いもの」を受け取り、自らを巨人とみなして戦闘に従事するのである。

こうした集合体としての「抽象」という考え方は、この詩集において、実は、戦争というテーマを離れても随所に示されている。例えば、“Paisant Chronicle”には、“Notes toward a Supreme Fiction”にも出てくる「主要なる男」(“major man”)という概念についてのコメントがあるが、この概念も個人の集合体を擬人化した「抽象的」な存在を指し示すものと見なしうる。

百姓の年代記

主要なる男たちとは何か。すべての男たちが勇敢である。  
すべての男たちが我慢強い。偉大なる大尉は偶然の選択  
に過ぎない。そして最も厳粛なる埋葬は  
百姓の年代記である。

男たちは男たちに

賞賛されるために生きる、それゆえすべての男たちは  
すべての男たちに賞賛されるために生きる。  
国民は国民に賞賛されるために生きる。人種は勇敢である。  
人種は我慢強い。人種の葬儀の華麗さは  
個々の華麗さが数多く集まったものであり  
人類の年代記は、百姓の年代記の  
総体である。

主要なる男たち

これは別だ。彼らは現実を超えた人物でありながら  
現実によって構成されている。彼らは  
男たちを素材として生み出された虚構の人物である。  
彼らは男であるが、作られた男である。  
彼らは信じることを可能にする無である、  
偶然による英雄以上のものであり、神話としての  
タルチュフ以上のもの、最高のモリエールである、  
長い間禁じられていたとはいえ、たやすい投影なのである。

パロックの詩人はいまだに彼を一人の男と見るかもしれない、  
ヴァージルとして、抽象として。しかし、彼を自分自身の目で見よ  
その虚構の男を。彼はカフェに座っているかもしれない。  
テーブルには田舎のチーズ料理と  
パイナップルが載っているかもしれない。そうに違いない。  
(CP 334-335)

「一人の男」(a man)の総体として「複数の男たち」(men)があり、「複数の男たち」

の総体として「国民」あるいは「民族」(nation)があり、その総体として、あるいは、それに並ぶカテゴリーとして「人種」(race)が置かれ、「人種」よりもさらに上位に来るものとして「人類」(humanity)がある、とスティーヴンズは彼がしばしば用いる疑似論文調のレトリックを使って示唆する。そして、最上位にある「人類」の年代記は百姓の年代記<sup>6</sup>であるということによって、こうした集合体はいずれも、我々のごく身近に見られる極めて素朴な存在者たちの集積であることを示している。

ただし、詩の第2連、第3連では、「主要なる男」(major man)が、こうした部分と全体の構成の論理を越えるものとして描かれている。この「主要なる男」は、“Gigantomachia”における「巨人」と同様、“Notes toward a Supreme Fiction”において展開される「最高の虚構」(supreme fiction) すなわち、理想の詩の担い手であると考えて良いだろう。「主要なる男」は、ここではその内容がはっきりとは示されないが、何らかの特別な能力を持った、理想の人間像であることが示唆されている。そして、「最高の虚構」の担い手である「主要なる男」は虚構の人物像であるが、それは身近な人物によって具現されねばならない、とスティーヴンズは言う。

複数の個人の集合を抽象化された人物像として捉え、その虚構の人物像を具体的な個人が体現するという着想は、“Notes toward a Supreme Fiction”の“*It Must Be Abstract*”(X)にも見出される。

それは抽象的でなければならない(X)

主要なる抽象は人類の観念

そして主要なる男がその代表 単数であることよりも  
抽象であることにおいて有能な人

粒子としてではなく原理として多産な人

一つの例外以上であり、大衆的なものの一部  
(されど英雄的な一部分)であることにおいて

幸福な産出力、花ほころばず豊穰な力。

主要なる抽象は大衆的なもの

生命を持たぬ難しい顔。それは誰だ。

人間的な願望ゆえに怒り狂ったいかなるラビが、

ただ一人歩きながら、このうえなくみじめで

このうえなく勝ち誇って叫ぶいかなる族長が

このばらばらなひと一人一人を見ながら、ただ一人を  
古びたコートを着てだらしのないズボンをはき、街の向こうで  
かつてあったものをかつてあった場所に探す人を

見ないことがあろうか。

朝の空には雲一つない。彼だ。あの古いコート  
あのだぶだぶのズボンの男。

彼なのだ、エフィービーよ、作るのは、作り上げねばならぬのは、  
なだめるのでなく聖化するでもなく、ただ単純に  
その究極のエレガンスを提出しなければならぬのは。

(CP 388-389)

周知のように、“Notes toward a Supreme Fiction”は「最高の虚構」(supreme fiction)、つまり、単純化すれば理想の詩の概要を述べようとしたものだが、それは「抽象的」でなければならぬ、とスティーヴンズは言う。それでは、その「抽象的」な虚構が描くものは何か。スティーヴンズの答えは、雑多な個人の集合を表象する抽象的な人間像であるというもののように思われる。「主要なる男」は、そのような個々の人間の総体、すなわち人類の抽象的な「代表」(exponent)なのであり、スティーヴンズはこの詩の前半でその属性を並べている。“Paisant Chronicle”でも示されているように、その「代表者」は、人類の総体の中から必ずしも無作為に選ばれた者ではない。それは虚構の抽象的な人物像であるがため、単一の個人ではなく、むしろ原理的な存在である。複数の人物のうちの誰でもよい一人(a man)ではなく、人類という抽象的観念(the man)を理想的に体現するような人物像でなければならぬと言うのである。

スティーヴンズは1942年の講演の中で、詩人の使命を「生に、それなくしては私たちが生を理解することができぬような最高の虚構を与える」(NA 40)ことだとしているが、この言葉に従い、「最高の虚構」とは、戦争、不況、その他の困難の中で人々に生きるための指針を与えるような、いわば、宗教に代わる新しい虚構のことだと考えると、ここに登場するラビや族長は、自分に従う者たちのために、そのような「最高の虚構」を希求する人物とみなすことができるだろう。「最高の虚構」を獲得することができれば、彼らはそれによって、自らの民族や部族に属する一人一人にそのような理想像、すなわち「主要なる男」を示すことができるだろう。スティーヴンズは、そのような「主要な

る男』の一つのモデルとして、不幸な人々の中に一人歩く浮浪者風の人物を描いている。その人物像は、Bloom が言うように、ホイットマンやチャップリンの姿を彷彿とさせるものだが(Bloom 191)、スティーヴンズは単に、「主要なる男」の重要な属性の一つとして大衆的であることを示唆しているのに違いない。理想となる人物像は、身の回りにいる、ごくありふれた人の中に見出されねばならないという主張である。

スティーヴンズにとって、「抽象」は本来ばらばらである人々に集合体としての統一性を与えるとともに、それらの人々の集合体を代表する虚構の個人をも描き出すものであった。そして、その虚構の人物を明確に描き出すものこそが「最高の虚構」に他ならない。しかし、戦争という文脈を考慮に入れると、スティーヴンズの「抽象」についての考えは、死者のコレクティブという、戦死者の賛美を思わせる方向に向かうようにも見える。個人としての兵士の死は、より大きな兵士の集合体が形成する、歴史を越えた生の中の一つの出来事に過ぎず、その集合体としての生が存続する限り、個人の死は無意味ではない。同様に、時を越えた兵士の集合体を「巨人」として、あるいは「主要なる男」として擬人化し、その理想化された超越的な兵士の集合体に、それぞれの兵士が自己同一化を果たすことによって、個人としての兵士も類似希な勇気を獲得し、自ら巨人として生き、そして死ぬことができることになる。スティーヴンズの現実と想像力の関係についての考えは、本質的に、死の恐怖に直面する兵士を対象にした言説として利用可能なものであった。迫り来る現実の圧迫に対し、想像力が、その中で生きる人に頼るべき虚構を与えるという考えは、迫り来る現実の一変種である戦地での死の恐怖に対して、詩人がその恐怖を押し戻す力を与える虚構を作り出さなければならないという考えに改変しうるからである。“Notes toward a Supreme Fiction”の“Coda”で、スティーヴンズは次のように語る。

詩人の詩行が、彼の些細なシラブルがなければ

不可避の変調を経て血のなかに固まる  
その調べがなければ、兵士は貧しい。  
そして闘いと闘い、それぞれに勇敢な者がある。

いかに単純に虚構の英雄は現実の英雄になることか。  
死なねばならぬとき、正しい言葉を得た兵士はいかに喜んで死ぬことが  
忠実なる言葉のパンを食べながら、いかに喜んで生きることが。  
(CP 407-408)

「闘いと闘い、それぞれに勇敢な者がある」 この表現には、詩人も兵士と同様、共同体のために闘っているのだという、詩の有用性に対するスティーヴンズの自負が窺われる。その意識は、彼が、単行本として出版された *Notes toward a Supreme Fiction* の裏表紙に、本の内容を示すためにこの箇所を印刷してほしいと希望したという事実からも窺うことができる。しかし、詩人の言葉と虚構によって、兵士が喜んで死ぬというレトリックは、現実からの圧力に対抗する有益なる虚構を作り出すというスティーヴンズの詩論が、同時に、死の恐怖を隠蔽し、場合によっては、死を賛美する機能をも果たしているものであることを見逃すことはできまい。<sup>7</sup>

### 3. 家系と抽象

抽象としての人類の総体、コレクティブとしての人々の集合体をめぐる思索を展開していた詩人が、自分自身の生を、より広範な連続体の一部分として考え始めることは極めて自然なことと言えるだろう。この時期、スティーヴンズは自身のルーツに興味を持ち始め、Lila James Roney をはじめとする専門家に自分の家系を調べさせ、1943年には2巻本の報告書と、そこに現れる人名、地名に関するポートフォリオ2冊分の写真を手に入れている(Bates 288)。先に見た“Paisant Chronicle”に出てくる chronicle という言葉が、このルーツ探しを反映するものとも考えることもできるだろう。*Transport to Summer* には、他にも、スティーヴンズの自身の系譜への関心を反映する詩が何篇か収録されている。“Dutch Graves in Bucks County”、“The Bed of Old John Zeller”、“Analysis of a Theme”、“Two Versions of the Same Poem”、“Extraordinary References” といった詩がそれである。一例として“Dutch Graves in Bucks County”を見てみよう。

#### バックス郡のオランダ人墓地

怒った男たちと猛り狂った機械たちが  
地平線の小さな青から殺到して  
中空の大きな青へと向かう。  
男たちは雲のなかでちりぢりになる。  
車輪は大きすぎていかなる音もたてない。

そしてわが同朋よ、お前たちは、煤けた住まいのなかで  
骸骨のドラムを叩いている 音もたてずに。

叫び声と話し声が聞こえる。  
足を引きずりながら中空を歩く男たちがいる。  
男たちは動いている、行進して  
軽く足を引きずっている、一同に  
行進している者たちの重い軽さとともに。

そしてお前たちがわが同朋よ、ちっぽけな暗闇の中で  
古いオランダの旗がはためく。

(中略)

他にも兵士たちがいたのだ、他の人々がいたのだ  
太陽が現れるように現れた男たちがいたのだ、  
夜の刺の下をくぐって、早くにやってきた子供と遅れてきた放浪者が  
幾多の年月を経て、ついにうち負かされ破れた者が  
何物も得ることなく眠りの無知にまどろむ者たちがいたのだ。

(中略)

そしてわが同朋よ、お前たちは盲のなかで見つめる  
新しい男たちの新しい栄光が集まるのを。

(CP 290-292)

スティーヴンズの祖先は、ペンシルヴェニア州バックス郡(Bucks County)の出身であるが、彼は、自分の父の母方の家系がオランダからバックス郡に来たことを確認している。アメリカに最初にやってきた彼のオランダ人の祖先 Dirk Hanse Hogeland は、戦争のために祖国を離れることにし、船で New Amsterdam に到着、Flatsbush という場所に入植した。17 世紀半ばのことである。その孫の Direk が、そこから Bucks County に移住したという。Filreis によれば、スティーヴンズは、この詩を書いたから 3 年の間に、少なくとも三度、自分のオランダ系の祖先の墓を訪れている (Filreis 122)。

この“Dutch Graves in Bucks County”は、戦争を描写するスタンザと、ボードレールの詩から取られたと考えられる「わが同朋」(“my semblable”)という言葉を用いて、自分の

祖先への思いを伝えるリフレインとが交互に並ぶスタイルで書かれている。詩は「怒った男たち」が機械とともに戦場に殺到する場面の描写で始まる。それに対比されるように、最初のリフレインでは、「煤けた住まいのなかで / 骸骨のドラムを叩いている」死者となった祖先たちへの呼びかけがなされる。現在の戦場の描写と、いにしへの戦火の中にあった祖先への呼びかけとの対比を反復することによって、スティーヴンズは、現在の兵士と祖先たちとを徐々にオーヴァーラップさせていく。先に見た兵士の集合体、すなわち、“Gigantomachia”でスティーヴンズが「抽象」と呼んだ「兵士の総体」という考えが、ここにも確認できる。現在の兵士はただ単に、その兵士一人の生を生き、またその個人としての死を遂げるだけではない。兵士の死は、死者の総体の中に収斂していくのである。それは例えば、詩の中程の「他にも兵士たちがいたのだ、他の人々がいたのだ」で始まるスタンザ、あるいは、詩の後半の「そしてわが同朋よ、お前たちは盲のなかで見つめる / 新しい男たちの新しい栄光が集まるのを」というリフレインからも知ることができる。過去の戦争による死者たちは、いまや現在の戦争で戦う兵士たちとの連帯感を示しているのである。

スティーヴンズの家系への関心を反映する今ひとつの作品“Analysis of a Theme”でも、同様に、時を経た人間集団の抽象化の試みを見て取ることができる。この詩は、「幼いブランディーナに三本脚のキリンの話をしてやった日、私は何と幸せだったことが...」(CP 348)という「テーマ」に、精神分析の場面を思わせないでもない「分析」が加えられるという体裁をとっているが、「ブランディーナ」(Blandina)という名前は、スティーヴンズの先祖探しの探索によって浮かび上がってきた父方の祖先の名前 Blandina Janse van Woggelum Stevens (Richardson 36) から採られたものである。Lensing によれば、スティーヴンズは、家系調査の専門家 Lila James Roney に宛てた手紙の中で、この祖先の女性に言及して、「ブランディーナもまた自分の家族にある種の誇りを抱いていたことでしょう。その家族は、彼女がエイブラハムと結婚した時には、すでに一世紀の半分以上この国に存続していたのですから」と述べているというが(Lensing 155)、この詩の「分析」の中に現れる「時の怪物たち」を、祖先と自身を結ぶ、時間を超えたコレクティブとしての人間集団の連続体として解釈することも、あながち無理な試みではないであろう。

けれども、時の深みの中空を  
その抽象的な動きの中を

形にならぬ時の怪物たちが動く、  
形ある博識ぶりも

いかなる名前も持たぬまま。

目に見えぬまま、彼らは動き存在する、  
言葉を話す地虫でもなく、羽根の生えかわる  
鳥でもなく

想像力の彼方にあり  
手をつけられることなく  
休日のパリでも

ブローニュの森の遊園地でさえ  
手に入れられぬ  
純粹なるきらめきとして。

(CP 348-349)

「抽象的な動き」(abstract motion)を見せる「時の怪物たち」は、人間の想像力の及ばぬ超越的な領域の比喻とみなすことも可能だろう。しかし、この時期のスティーヴンズの系譜への関心、そしてこの詩におけるブランディーナという先祖の名前の使用、さらに、詩の末尾での先祖の言葉を模した詩句 “We enjoy the ithy oonts and long-haired / Plomets, as the Herr Gott / Enjoys his comets”(CP 349) の使用を考慮に入れれば、この「時の怪物たち」は、“Dutch Graves in Bucks County”に見られた兵士の総体を想起させる、集会的で抽象的な人の連続体を指すものと解することもまた可能である。そのような連続体は、目に見えず、名前もなく、想像することも不可能な、「形にならぬ怪物たち」(“immaterial monsters”)として動き、存在しているとスティーヴンズは言う。現在時の戦場で戦う兵士たちが、過去に別の戦場で戦った兵士たちによって形成される、抽象的な兵士の連続体の一部として捉えられたように、スティーヴンズによれば、人は自分の祖先たちが形成してきた人間の集合体の中に位置づけられているのである。

現在を生きる人間と祖先との連続性の強調は、さらに、“Extraordinary References”でも繰り返されている。

#### 驚くべき参照事項

母親は子供のヘアリボンを結び  
平和を感じる。私のヤコミンチェよ！

おまえの曾祖父さんはインディアンと戦ったのよ。

テュルペホッケンの涼しげな太陽は  
その逆棘のある野蛮な蜂起を指し示しつつ、平和である。  
こうしたいにしえの血と脳の散逸は

ありふれた人々と場所と物の  
驚くべき参照事項として  
私たちを一種の讃辞の中に書き出す。

私のヤコミンチェよ！おまえのお父さんが死んだ  
この戦争の後の最初の春は、お父さんのためにまだ息をしている、  
私たちのために、再び微かな息をしている。

相続された庭では、使い古しの  
ウェルトウムヌスが均衡を保っている。  
子供の三本のリボンは編み込まれた彼女の髪の中にある。  
(CP 369)

テュルペホッケン地区( the Tulpehocken )は、ペンシルヴェニア州の Berks County にある地名であり、スティーヴンズのオランダ系の祖先ゆかりの土地でもある。そこにある Trinity Tulpehocken Church の壁には、祖先の一人 George Zeller が寄贈した石片が埋め込まれており、そこに彫り込まれた文句を、スティーヴンズは詩集の表紙に記載させている (L 541)。この詩の第 1 連と第 4 連には、子供の髪のリボンを結んでやる母親のものとおぼしき言葉が 原文ではイタリクス体で 書かれているが、「ヤコミンチェ」( Jacomyntje )という子供の名前も、先の「ブランディーナ」同様、スティーヴンズの祖先の名前から採られている (L 4)。詩集の冒頭に置かれた “God Is Good. It Is a Beautiful Night” 同様、「平和」あるいは「讃辞」という言葉を配したこの詩も戦争の終結がもたらした解放感を感じさせる。しかし、見落とすことができないのは、“Dutch Graves in Bucks County” と同じように、この詩でも、現在時に生きる者と過去に生きた者との連続性が強調されていることである。子供の名前に祖先の名を用いることによって、スティーヴンズは、平和の回復した現在時に母が娘のリボンを結ぶ場面が、祖先の時代にも母から娘に対して行われたものであることを示唆している。また、母親の言葉の中で、ヤコミンチェの父が戦争で死に、また彼女の曾祖父が「インディアンと戦った兵士」( an Indian fighter )で

あったことが示されるが、戦死した父のために春がまだ息をしているという表現は、個人の死を超越して連続と続く生の存在を示唆するものであり、そのトーンは、父と曾祖父と、さらには後に残された母娘とが一つの連続体の中に生き続けているという虚構を示唆するものと言える。「相続された庭」への言及も世代を越えた家系の連続性を暗示するものである。

もっとも、一見すると、ここでその連続性はオランダ系移民というエスニシティの中に閉じられ、その連続体の中から先住民が除外されているように見えることは確かである。この詩において“the Tulpehocken”と呼ばれる土地は、インディアンと戦った兵士であったヤコミンチェの曾祖父らオランダ系移民がアメリカ先住民から篡奪した土地という含意を持つ。戦いの末に先住民から奪われたとおぼしきテュルペホッケンの土地は、スティーヴンズの意識の中で、いまや、オランダ系の名前を持つ子供が「相続する」のである。この詩集に見られた、時を越えた人間の集合体あるいは連続体への志向は、人種を越えたアメリカ人あるいは人類一般の集合体を想定するものではないという批判も可能であろう。

しかし、詩のトーンが示唆するのは、戦いに参加したオランダ系白人とアメリカ先住民の双方は、ともに土に還り、何年にもわたる四季を経て、いまや融解したとする見方である。「テュルペホッケンの涼しげな太陽」がインディアンの「野蛮な蜂起」を想起させるという驚くべき対応関係を示しながらも、スティーヴンズは「いにしえのこうした血と脳の散逸」を、平和に生きる我々の生が体現する「讃辞」(死者を讃える言葉)の reference として、つまり、平和の背後に隠された、忘れてはならぬ歴史的参照事項として扱っている。曖昧な形でながら、そこに先住民の「血と脳の散逸」に対するスティーヴンズのまなざしを見ることもできるだろう。興味深いことに、作品中の庭には「使い古しの/ウェルトウムヌスが均衡を保っている」。四季を象徴するウェルトウムヌスの像は、たんにどこかからもらわれてきて、その庭にかろうじてバランスを保ちながら立っているものにすぎないと解することもできよう。しかし、子供の編み込まれた髪が先住民のそれを想起させるものであることから、四季の推移と果樹・果実を司る神が保つのは、オランダ系のアメリカ人と先住民とのバランスであるとも言えるだろう。この詩に見出せるのは、第二次大戦終結の安堵感であるとともに、戦闘の末にもたらされるべき融和への希望である。

スティーヴンズの詩は、現実からの圧迫に対抗する想像力の自律した世界を構築するものと見なされることが多い。しかし、詩の中に見出される「抽象」への言及に着目すると、一見現実から乖離した想像の世界の描出と見える詩行の中にも、現実への積極的な関与の姿勢があることを見て取ることができるだろう。戦争という過酷な現実を背景

に書かれた *Transport to Summer* 所収の諸作品には、それまでに培われた現実と想像力についてのスティーヴンズの思索が、戦争という具体的な現実に対応し、適用されていく様を窺うことができる。スティーヴンズは、「最高の虚構」は「抽象的でなければならぬ」と断じたが、その主張の一つの意味を、戦争を遂行する兵士の集合を含む、集団的アイデンティティの創出に求めることができる。*Transport to Summer* に見出されるこうした現実世界への対応を見極めることは、想像力と現実をめぐるスティーヴンズの思索をより正確に解釈するための一歩となることであろう。

## 註

- 1 初出年に関する情報は Edelstein による。1946年12月11日付けの Henry Church 宛て書簡によれば、*Transport to Summer* がこの時までに製本にかかっていたと考えるのが妥当である(L 542)。収録作品を年代順に並べ、草稿が示す証拠、書簡、出版年月日(“manuscript evidence, correspondence, or date of publication” [Stevens, *The Palm* vii]) に基づいて個々の作品に年号を振る *The Palm at the End of the Mind* も参照のこと。
- 2 本稿中のスティーヴンズ作品の和訳はすべて拙訳。直訳を基本とした。
- 3 引証に際し、スティーヴンズのテキスト及び書簡集には次の略語を用いる。CP: *The Collected Poems of Wallace Stevens*、L: *Letters of Wallace Stevens*、NA: *The Necessary Angel*。
- 4 もっとも、1942年の初出時には、この詩は、想像力が戦争の悲惨という現実を乗り越えることを講ずる詩と読められたはずである。
- 5 Whitman の “Song of Myself” には、Walt Whitman という一個人が虚構としての自己 (“Real Me”) となり、続いてこの “Real Me” が世界の様々な存在者を吸収して拡大し、最後に詩の読者がこの巨大化した “Real Me” から学ぶことを促すという展開を見ることができる。文献中の Steele 67-99 も参照のこと。
- 6 O.E.D. によれば、原題中の “paisant” は “peasant” の obsolete form である。
- 7 戦場における死の恐怖を乗り越えるコレクティブな生という着想は、T. S. Eliot の “Little Gidding” で用いられたレトリックを想起させる。文献中の長畑 (特に 148-151) を参照のこと。

## 引用文献

- Bates, Milton J. *Wallace Stevens: A Mythology of Self*. Berkeley: University of California Press, 1985.
- Bloom, Harold. *Wallace Stevens: The Poems of Our Climate*. Ithaca: Cornell University Press, 1977.
- Edelstein, J. M. *Wallace Stevens: A Descriptive Bibliography*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1973.
- Filreis, Alan. *Wallace Stevens and the Actual World*. Princeton: Princeton University Press, 1991.
- Lensing, George S. *Wallace Stevens: A Poet's Growth*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1986.
- 長畑明利「卑俗さと力 スウィーニー詩篇とその後」富山英俊編『アメリカン・モダニズム パウンド・エリオット・ウィリアムズ・スティーヴンズ』せりか書房, 2002. 121-151.

- Richardson, Joan. *Wallace Stevens: The Early Years, 1879-1923*. New York: William Morrow, 1986.
- Steele, Jeffrey. *The Representation of the Self in the American Renaissance*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1987.
- Stevens, Holly, ed. *Letters of Wallace Stevens*. New York: Knopf, 1966.
- , ed. *The Palm at the End of the Mind: Selected Poems and a Play by Wallace Stevens*. New York: Knopf, 1971.
- Stevens, Wallace. *The Necessary Angel: Essays on Reality and the Imagination*. New York: Knopf, 1957.
- . *The Collected Poems of Wallace Stevens*. New York: Knopf, 1954.

